としてとらえることができる。表1からは，No.14，No.20の子供が学業不振児に該当する。ここでは，No.14を対象にして，学業不振の背景や指導のあり方を明らかにしたい。

○　知能検査と標準学力検査からの解釈と診断

No.14の子供は知能偏差値は65であり，知能段階からみると5に位置し，知能レベルは上位にある。当然，学力水準も高いレベルが期待できるはずである。しかし，学力偏差値は平均51，段階でみると3に位置し上位ではない。一応，全国水準に到達していることは判明できる。ところが，新成就値は−10と低くアンダーアチーバーの一群に位置し，強い学業不振に陥っていると言える。

次に，教科間の差異をみると，国語は4の段階で満足できるが，社会，数学，理科は3の段階にとどまっている。

国語以外の教科については，各教科の問題の難易度，誤答の分析や学級の得点傾向などをみながら，満足できる成績が得られなかった原因を追究する必要がある。もし，教科のある領域が学級全体として落ちこんでいる傾向にあれば，教師側にも責任があるので，指導法の反省をし，日常指導でこの点に力を入れる必要がある。

②　学業生活のつまづきを明らかにするために（学習適応性検査（ＡＡＩ）の活用）

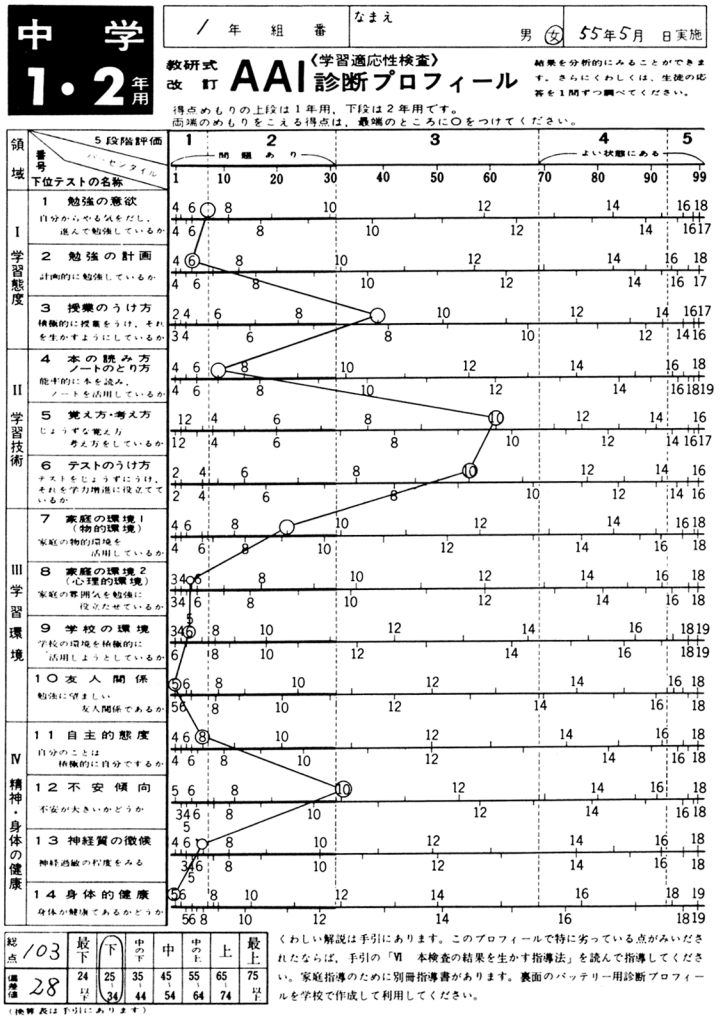

図3　No14のＡＡＩ診断プロフィール